

20年を迎えたエムズシステム

有限会社 エムズシステム
104-0041 東京都中央区新富 2-1-4
<http://mssystem.co.jp>



デジタルという進化の向こう側

◆その3 (最終回)

『遅刻してくれてありがとう』(日本経済新報社)という本の著者、トーマス・フリードマンは、「今、すべてが加速している」と言っている。地球温暖化の加速。デジタルによるグローバル化の加速。そして半導体の進化によるコンピュータ処理能力の加速。この3つの加速がさらに加速化されることによって、古く、ゆっくりしたものがかつてないほど大切になってくると、彼は力説している。が、今ならばもうひとつ、ウィルスの加速を付け加えなければならないかもしれない。

文：三浦光仁

有限会社 エムズシステム 代表

ヒトはバランスを取るもの。どちらかに大きく寄ると、その反対側への揺り戻しが必要になる。デジタル化が進むほど、生活のどこかでアナログの要素を求め、何かが悪く急速に進むのならば、ゆっくりと過ごす何か暮らしの中に必要になる。



人工的なものの密度が高まれば高まるほど、日々の活動の中で自然なものを探し、人の心にゆとりをもたらす、ゆっくりとした時の流れを感じながらリラックスした空間をつくり出すものが必要とされる。テレワークが常態化している今日では、まさに自宅の生活空間の質が今まで以上に問われることになるだろう。

人工的なものに囲まれているとなぜか落ち着かない。自然なものに包まれていると、心安らぐ気がする。当たり前のことであり、そして誰でもそう思うことなのに、私たちの身の回りから自然なものが日々減っていき、人工的なものが増えていく。心の底から湧いてくるぎきに少しの間でも耳を傾ければ、本当は何を望んでいるのかははっきりとしているはずなのに、なぜか逆方向のベクトルばかりが働くようだ。そのベクトルのことを経済活動と呼んでいるのだろうか。

2003年に『音と文明』(岩波書店)で、音の環境学を語った大橋力さんが最近著した『ハイパーソニック・エフェクト』にはこう記されている。

「ハイパーソニック・エフェクトとは超高周波が脳深部を劇的に活性化し、さらに心身全体の働きを高める現象である」

前著の『音と文明』でも、ハイパーソニック超高周波を含む、超複雑な音が満ち溢れているのが熱帯雨林であり、ヒトは長らくその環境に生き、暮らしていたので、そのような音環境こそ、心身が最も安らぎ、同時に活性化すると述べられている。だから「聴こえていない音」にも耳を傾け、全身でその気配を探り、生命維持のためのアンテナ全開の状態ヒトは生きてきた。それは音を捉えるというよりも、音という媒体がある空間そのものを把握することに近かったかも知れない。

生命体の発する波動は激減し、代わりにガラスとセメントに囲まれた環境の中で、電波や電磁波だけが濃密な空間に置かれ、私たち、ヒトという生命は本質的な情報から隔離されたまま毎日を生きている。

この中でひとときの安らぎを得る手段はいったい何かがあるのか。ハイレゾと呼ばれている音源は何において優れているかと言

えば、ヒトの可聴範囲、——音として認識できる可聴周波数帯域——を超えた超高周波も再現することで、その空間そのものを体感してもらえる、ということに尽きる。

音を聴くのではなく、音の鳴っている、または音が存在している空間そのものを再現したものを体感するというにほかならない。そのような環境に身を委ねることで、私たちは心からリラックスできるのだと思う。

ただ、私たちヒトが慣れ親しんだ熱帯雨林に満ちていた音は、すべて無指向性のものだった。それは人の声や生の楽器の音と同じ。宇宙に向かって均等に広がり、拡散する音に包まれていた。

しかし、現代のヒトは99%指向性の強い音に囲まれながら生活、活動している。デジタル音、機械音、直接音、指向性の強い音ばかりが溢れている。デジタルという進化の向こう側に私たちが本当に安らげる、くつろげる音があるはずだ。『遅刻してくれてありがとう』と言える心のゆとりを育んでくれる音があるはずだと思う。

このような時代の、このような環境の中で生活していくということ。それも我慢と忍耐の生活ではなく、豊かに楽しく、伸び伸びとした生活を日々営んでいくためには、その生活空間そのものを居心地の良い、リラックスした環境に整える必要があるだろう。いま、私たちの「聴覚に与えるべき音」「自然な音の世界」がここにある。

